

# 平成29年度 鳥取県議会タイ訪問団 報告書

平成29年11月7日（火）～10日（金）



鳥取県議会

## 1 訪問日程及び訪問先

平成29年11月7日（火）～10日（金）

タイ王国 バンコク市、ラーヨン県

※詳細は「4 日程表」のとおり

## 2 訪問団メンバー

団 長 齊木 正一 議員

副団長 伊藤 保 議員

秘書長 広谷 直樹 議員

安田 優子 議員

興治 英夫 議員

島谷 龍司 議員

<随行> 議会事務局 調査課 課長補佐 宇畑 敦志  
係 長 池原 真

## 3 所感及び県政に対する提言

鳥取県議会として、平成27年10月に続いて二度目となる今回のタイ訪問団は、タイと鳥取県の経済交流の促進や、タイから鳥取への観光誘客など人的交流の拡大を図るため、企業進出、輸出、大学との連携、訪日観光客の動向等を調査することを目的に、タイ王国バンコク市及びラーヨン県を訪問した。

まず、タイへの企業進出についての動向と課題について所感を述べる。

タイの面積は51万平方kmで日本の1.4倍、人口はほぼ半分の6,600万人である。名目GDPはASEANで2位、1人当たりGDPは小国を除けばASEANでマレーシアに続き2位であり、東南アジア市場において非常に重要な戦略的地位を占めている。

タイでは、現在5,400社を超える日系企業が活動しており、この3年間で900社近く増加している。外国資本によるタイへの直接投資額では、日本が全体の2～3割を占めており、最多である。タイと日本は、非常に強い経済的な結びつきを構築している。

本県からタイには5社が進出しており、今回はそのうちの2社、金属加工業のタイ・サミット・メイジ・フォーミング社と、情報サービス業のエッグタイランド社を訪問した。

タイ・サミット・メイジ・フォーミング社は平成22年に創業を開始し、好調な経営を維持している。その理由として、タイ進出に際して「高い技術を持つ日本の鍛造企業にぜひタイへ進出してもらいたい」との国内取引先からの誘いがあったことに示されるように、長期にわたり蓄積した高い技術と信頼が基盤となっている。一方で、本社から派遣される社員にはタイでの生活や家族の納得などの課題があり、県内企業の海外進出支援においては経営面・生産面だけでなく、生活面にも配慮する必要があると感じた。

一方、エッグタイランド社は、本年4月に会社設立され、6月にオフィスを開設した新しい会社である。タイ在住邦人をビジネスパートナーとして会社を設立し、タイ人を雇用して経営する形態であり、こちらは鳥取からの社員派遣はない。本社との日常のコミュニケーションは、毎日のテレビチャットであり、情報サービス業という業態だけでなく経営方式についても新しい取組である。さらに、

本年11月、外国人技能実習制度に介護が追加されたことに伴い、現地の学校と連携して人材育成にも取り組み始めている。

この点に関して、介護職員については深刻な人材不足が指摘されているが、本県において介護分野での外国人技能実習生の受入に関して賛否両論の声が挙がっている。もとより、外国人技能実習制度は開発途上地域への技能移転などによる国際協力を目的とし、人材確保を直接の目的とするものではないが、本県においてどのような取組の必要性や課題があるのか、検討を進めるべきと考える。

加えて、海外進出については、事業承継上の意義を訴える声もあった。中小企業が海外進出することでイメージアップにつながり、さらに後継者の人材育成や人的ネットワークの場としても機能できるという。こうした視点でも、海外進出支援のあり方を検討する必要があると感じた。

次に、タイへの食品・食材の輸出に関する動向と課題について所感を述べる。

タイでは豊かになる人が増えて市場は広がっており、日本の食材や料理に対するニーズが高まっている。デパートでは日本の果物が並び、若い人たちを中心に焼肉など和牛のニーズが高まっている。日本食レストランは、バンコクで1,700軒、全国で2,700軒を数え、東南アジアでは圧倒的な数に上る。客はタイ人が中心であり、ブランド戦略の展開により観光誘客とのリンクも可能となる。

鳥取の食材は、日本酒、冷凍エビ、梅ジュースなどが市場に出ており、今回訪問した日本食レストラン・グリル東京では、ベニズワイガニの加工品、カニみそ、野菜、果物、梅ジュースなどを使っている。客はタイ人が中心だが、特にカニはタイ人にとっても好評という。料理長からは「鳥取の食材は本当によく、もっと使いたい」との声があった。

一方で、課題として、量を集められずロットが少ないことで、輸送コストが高くなってしまいうことが挙げられる。また、商社のルートの関係もあり、例えばオレイン55など、なかなか思ったように使えない状況にあるという。鳥取の食品や食材は、海外で立派に通用するものであり、タイの人たちに広く味わってもらえるよう、隘路の打開に向けた取組を一層強化する必要がある。

次に、タイの大学との連携に関する動向と課題について所感を述べる。

今回訪問したマヒドン大学は、タイで最も歴史のある国立総合大学で、世界的な大学・研究機関とのネットワークを有している。平成27年11月、本県との医療機器分野における協力に関する覚書を締結して以来、本年10月を含めて計3回来県され、県内企業との意見交換などに臨まれている。

本県の熱意は先方も高く評価しており、産学官金連携において、海外大学とのネットワークを個別企業支援に活用する試みは、グローバル化に対応した非常に意義深いものである。一層の関係の深化と成果の創出に向けて、取組を続けられたい。

最後に、タイからの観光誘客についての動向と課題について所感を述べる。

タイからの訪日客は、平成27年は80万人弱であったものが、平成28年は90万人を超え、今年には90万人後半となる見込みである。来年には、長らく懸案であった100万人を超える勢いとなっているが、これはASEAN諸国の中では飛び抜けて多い数である。その分、各都道府県ともタイを重点市場とし、プロモーションを強化して競争が激しくなっている。

その中で、鳥取の認知度はまだ高くないが、「名探偵コナン」はタイでも毎週テレビ放送して広く知られており、キラーコンテンツとなりうる。また、カニや雪へのニーズもある。さらに、JNTO（日本政府観光局）バンコク事務所・伊東所長は、平井知事はタイにとっても熱心だと評価しておられる。本県として何を売り込むのかを精査し、戦略的に具体的取組へと落とし込み、さらなる観光誘客とリピーター獲得につなげる必要がある。

一方、タイから鳥取への来訪ルートは、関西空港への深夜便利用が多いという。直行便のない国・地域からの誘客には共通する課題であるが、山陰インバウンド機構、関西広域連合、中国地域観光推進協議会、JR、バス会社など、県の枠を超えた広域ネットワークにより、広域観光ルートの構築を通じた誘客取組を一層充実することが望まれる。

2年前に続く今回の訪問を通じて、タイ経済の勢いと東南アジアにおける戦略的重要性、何より日本との強い結びつきが深く感じられた。本県が平成25年11月に東南アジアビューローを開設して4年が経過するが、その成果もあり、経済交流や観光誘客が一層深まってのように感じられる。

バンコク市中心部のシーロム交差点付近には、日本とタイ両国の国旗を掲げた「日タイ橋」がある。日本の政府開発援助により1992年に完成し、我々も直接それを目にしたが、日本とタイの深い絆の象徴となっている。本県とタイとの交流が一層深化し、人々の心にも多くの架け橋が掛かることを祈念して、訪問団の調査報告とさせていただく。

#### 4 日程表

月 日	日 程	移動手段	宿泊先
11月7日 (火)	7:05 鳥取砂丘コナン空港 → 羽田空港 7:20 米子鬼太郎空港 → 羽田空港 11:00 羽田空港発 16:15 バンコク・スワンナプーム国際空港着(時差△2時間)	ANA292便 ANA382便 NH847便	バンコク 市内
11月8日 (水)	9:30 <b>タイ・サミット・メイジ・フォージング社 調査</b> 14:30 <b>ジェットロ(日本貿易振興機構)バンコク事務所 調査</b> 16:00 <b>山陰合同銀行バンコク駐在員事務所・鳥取県東南 アジアビューロー 調査</b>	借上バス	バンコク 市内
11月9日 (木)	10:00 <b>JNTO(日本政府観光局)バンコク事務所 調査</b> 11:15 <b>エッグタイランド社 調査</b> 12:40 <b>グリル東京 調査(兼昼食)</b> 15:30 <b>マヒドン大学工学部 表敬訪問</b>	借上バス	バンコク 市内
11月10日 (金)	10:25 バンコク・スワンナプーム国際空港発 17:55 羽田空港着 19:30 羽田空港 → 鳥取砂丘コナン空港 20:05 羽田空港 → 米子鬼太郎空港着	NH848便  ANA299便 ANA389便	—

#### 5 訪問先の概要

【平成29年11月8日(水)】

##### (1) タイ・サミット・メイジ・フォージング社

〔応対者〕 田辺浩一 総務部長、涌嶋利和 工場長

会社概要、海外事業展開の状況と課題などについて説明を受け、工場見学と意見交換を行った。主な意見交換の内容は以下のとおり。

【主な意見交換内容】(○：訪問団、●：視察先)

<●概要説明>

- ・タイ・サミット・メイジ・フォージング社(TSMF)は、タイの自動車部品大手企業「タイ・サミット・オートパーツ」などとの合弁企業である。「タイ・サミット」グループが株式の55%、明治製作所(本社・倉吉市)が40%を保有し、計4社が出資している。株式の過半を持つため、「タイ・サミット」グループが最終的な決定権を有する。なお、「タイ・サミット」グループは、設立40周年の大手財閥である。2009年1月に法人を設立し、2010年7月に操業を開始した。当時、リーマン・ショックで株価が低迷していたが、リスクを取った。工場では、鍛造(フォージング)による金属加工製品の生産を行っている。
- ・明治製作所がタイに進出したきっかけは、取引先であった新興工業(岡山県)が、先にタイに進出していたが、「高い技術を持つ日本の鍛造企業にぜひタイへ進出してもらいたい」との誘いがあり、決断した。明治製作所が鍛造、「タイ・サミット」が金属加工の企業なので、一貫して作業ができるところが有利であり、事業を成功させる大事な手段である。また、周辺にある「タイ・サミット」グループの工場とも連携して生産を行っている。
- ・売上高は、2012年は約10億円、2017年は約30億円の予定で、ほぼ3倍となっている。製品の95%が自動車・バイク向けで、あとは農業用機械向けである。自動車は、

- 1トン・ピックアップトラック用のものがよく売れている。納品先は「タイ・サミット」グループがほぼ3分の2を占めるが、日本・海外を問わず、あらゆる自動車メーカー向けの部品を作っている。用途は、エンジン、ミッション、クラッチ、伝達部分、足回りなどである。自動車部品はタイで製造し、それを外国に輸出して組み立てる分担になっている。
- ・社員は101人、うち常駐の日本人は私（総務部長）と工場長の2人である。このほか、出張で、設計と鍛造の指導者がそれぞれ1人来ている。私は明治製作所のある倉吉市の出身で、海外で働くのはいいチャンスだが、生活や家族の納得など苦労するところもある。勤務体制は2交代制で、2週間でシフトチェンジしている。土日も操業しており、時間外勤務もあるので、オペレーターには頑張ってもらっている。
  - ・工場には3つの主要ラインがあり、鍛造プレス機の規模によって「2500トン・ライン」（2ライン）と「1600トン・ライン」（1ライン）がある。敷地面積は1万坪で、これまで半分程度しか使っていなかったが、近々「1600トン・ライン」を1ライン増設予定で、現在整地作業中である。設計のためのCAD・CAMシステムや金型のマシニングセンターも稼働している。1か月830トン程度の生産能力だが、今は忙しく1,000トン近くを生産しているが、納期で苦労している。
  - ・立地しているヘマラート・イースタン・シーボード工業団地は、バンコクから112kmで、2時間ほどの距離である。レムチャバン深海港が27kmのところであり、材料納入に使っている。国は、タイ東部の工業生産（特に先端産業）を政策的に推進しており、従来の農業と観光中心の経済構造から脱却しようとしている。

#### <質疑応答>

○海外進出への明治製作所のメリットは何か。タイからの技術導入はあるのか。

- 一つは株主配当で、昨年度から実施している。もう一つは、人材交流。TSMFから技術供与料も支払っている。タイから日本への技術導入はなく、基本的に日本から流れる構造。

○拠点をここから移すことはあるのか？

- TSMFとしてはない。ただ「タイ・サミット」グループは、中国などに進出している。

○税制上の問題はないか。日本人は多いのか。日系企業間の交流は。

- 企業経営上は特にないが、タイでは相続税がなく「強い人は強いまま」と聞く。日系工場進出が多く、1時間ほど先のシナチャという町は日本人がつくった町と言われている。会議や親睦など国内ではできないことをやっていて、お互いの苦労が分かっているのも、機械が故障した時などは同業者で助け合ったりしている。

○愛社精神が少ないとの話も聞くが、タイ人の社員の頑張り具合はどうか。求人状況は。

- 日本人ほどは、勤勉だったり、きっちりやったり、言われたこと以上やるようなことはないが、まじめにやる方だと思う。ライン生産は、東アジア人に向いているのでは。タイ人は「ステップアップ」が基本で、ある程度技術力が上がると他社に動く。サラリーを上げたいが限界がある。仕事は大変だが、給与はいい方だと思う。求人をするとなんかきいてくれる。日本の本社ではなかなか人が来ないが、日本人の方は、仕事にどん欲でなくなっている気がする。

●電気自動車の話もあるが、自動車以外に生産を広げる気はないか。

- 憂慮しており、鍛造は減っていくと思う。ただ、電気自動車は中国・インドが進めているが、日本のエンジンにかなわないからそちらにシフトしているとも聞く。インフラ面を考えても全て電気自動車に移ることはないと思うので、すぐやろうとは考えていない。

●工業のオートメーション化はどうか。

○鍛造の際に人間の手を使うことは課題。オートメーションもやっており、今後進めていきたいが、多品種少量でやるとすると、今は手の方が早い部分もある。



説明者の皆様と玄関前にて



工場見学の様子

## (2) ジェトロ（日本貿易振興機構）バンコク事務所

〔応対者〕 三又裕生 所長、長谷場純一郎 海外投資アドバイザー

タイの経済の状況、日本とタイの経済交流の状況などについて説明を受け、意見交換を行った。主な意見交換の内容は以下のとおり。

【主な意見交換内容】（○：訪問団、●：視察先）

<●概要説明>

・タイは面積51万平方kmで日本の1.4倍、人口はほぼ半分の6,600万人。名目G

DPは4,000億ドル強で、日本の1割弱だがASEANではインドネシアに続き2位。1人当たりGDPは6,000ドル弱で、ASEANでは小国を除けばマレーシアに続き2位。GDP構成比では第2次産業が36%で、自動車関連と電気・電子、また食品が強い。イメージで言うと1970~80年代の日本に近いが、自動車関連と電気・電子は日系企業が大きな役割を果たしている。ただし、第1次産業はGDPでは8%だが就業者シェアは33%であり、人数は多いが所得は低く大きな社会問題となっている。バンコク周辺部と地方の格差は顕著で、政治的不安定にもリンクしている。

- ・タイと日本は結びつきが強い。ASEANの中で、観光のインバウンド（90万人台）とアウトバウンド（130万人）、また輸出入とも、タイがNO. 1である。タイの在留邦人は6.5万人で、1985年のプラザ合意に伴う円高後、タイへの投資が本格化し、定着した。日本人学校は3,000人を超え、世界最大である。日本食レストランは、バンコクで1,700軒、全国で2,700軒ほどあり、東南アジアでは圧倒的な数。バンコクでは、客はほぼタイ人である。
- ・2017年5月の調査で日系企業は5,444社であり、3年前に比べて877社増えている。サービス産業の構成比が半数を超え、中小企業の進出も増加している。また、外国資本によるタイへの直接投資額では、日本が全体の2~3割を占めており、最多である。タイの魅力としては、整備されたインフラ、一貫した外資優遇政策、自動車産業の集積、部材・サービスの容易な調達などがある。ただし、外国人事業法によりサービス業の外資参入規制が行われており、基本的には合弁企業が設立されている。
- ・政治情勢は、ややイレギュラーな状況にある。タイではタクシン（元首相）派と反タクシン派の抗争が深刻で、2014年5月に軍のクーデターが起こった。一応の三権分立は保たれているが、軍・警察の影響力は大きい。今年4月に新憲法が公布され、来年6月頃に下院の総選挙が行われる予定である。ただし、政治的な負の側面はビジネスの不安定さには直結していない。
- ・タイでは人件費が高騰しており、従来に比べて高付加価値化に成功できていない。1人当たりGDP1万ドル前後の国では成長が伸び悩む「中所得国の罠」が指摘されるが、まさにそのような状況にある。一方で、日系企業はタイを研究開発拠点としても期待している。なお、2020年頃から人口減少に向かうことが見込まれている。
- ・ASEANでは、ASEAN経済共同体の設立を目指し、関税撤廃や単一市場化を目指しているが、関税撤廃以外はまだまだこれからである。

#### <質疑応答>

○2016年、日本からASEAN諸国への輸出額は全て減っている理由は。

●円換算の金額であり、円高に伴って、表示上は金額が落ちている。

○少子・高齢化が進んでいるというが、どういう影響があるのか。

●2014~15年、タイで人材不足が起こり、人が採用できなかった。その時、自然発生的に、タイ「プラス1」（ラオス・カンボジア）が起こった。電気関係、かつら、コイル巻きなど、手のかかる作業、人手のいる作業などが「プラス1」に動いた。しかし2015年以降、人材不足が解消され、今はその動きも止まった。

○日本からの食品輸出、どんな規制があるのか。

●加工品にはあるが、1次産品にはなく、デパートでも日本の果物が並んでいる。豊かになる人が増えて、市場は広がっている。ただ、全都道府県が有名デパートや有名商社のルー



トを狙って競争している。

○都道府県間がかぶっている商品は何か。

●リンゴや肉類。なお、タイでは観音信仰で牛は食べなかったが、若い世代には薄い肉での焼肉がはやっている。



意見交換の様子



ジェトロバンコク事務所の前にて

### (3) 山陰合同銀行バンコク駐在員事務所・鳥取県東南アジアビューロー

〔応対者〕 山陰合同銀行バンコク駐在員事務所 山田裕介 所長

アジア・アライアンス・パートナー社（鳥取県東南アジアビューロー委託先）

橘内進 代表取締役、辻三朗 氏（鳥取県東南アジアビューロー専任担当者）

和テンション社バンコク事務所 辻村晶 氏（鳥取県東南アジアビューロー連携先）

タイの経済の状況、県内企業の進出状況、鳥取県東南アジアビューローの活動状況、鳥取県観光プロモーションの状況などについて説明を受け、意見交換を行った。主な意見交換の内容は以下のとおり。

【主な意見交換内容】（○：訪問団、●：視察先）

<●概要説明：山陰合同銀行>

- ・鳥取県内の地場企業のタイ進出は、明治製作所やエッグなど、現在6社。県外から鳥取県内に企業立地している企業のうち、タイに進出しているのは14社にのぼる。本行のタイでの取引先は130社程度で、鳥取・島根両県は5～6社ずつ、その他は岡山・広島・兵庫などである。タイの人件費も上がる中、高付加価値的な目的での進出が出てきている。労務者管理は、厳しすぎても緩すぎても駄目。国情に合わせる必要がある。
- ・タイを進出先ではなく取引先として考える企業も増えている。鳥取県中小企業団体中央会は、先日、9社のグループでこちらにいらっしやった。課題は、量を集められずロットが少ないことで、輸送コストが高くなってしまうことである。
- ・具体的な商品では、日本酒、冷凍エビ、梅ジュースなどが市場に出ている。オレイン55は、昨年2月に輸出認定を受けた。タイでは牛肉のニーズが高まっている。来週、「メタリクス」という製造業関係の大規模な展示商談会があり、両県からも出店予定。
- ・当行の海外拠点は、大連（20周年）、上海（10周年）、そしてバンコク（4周年）の3拠点。山陰インド協会のからみもあり、ジェトロ・ニューデリー事務所にも行員を派遣している。また、今年10月、本行も加わって鳥取県での地域商社設立が行われ、当面は国内向けだが、2～3年後には海外向けにも展開したい。
- ・前回、2015年10月のタイ訪問団にも対応させてもらったが、その後の変化はそれほど大きくない。経済は低迷し、クレジットカードなど個人負債が高まっている。なお、第1回目の返済では9割が返済しないが、コールセンターで督促すると、1か月で1割に減るといった話もある。
- ・先月、プミポン前国王の喪が明け、今後総選挙も予定されているので、経済政策や海外プロモーションに新機軸が出るかどうか、注視が必要である。

#### ＜●概要説明：鳥取県東南アジアビューロー＞

- ・アジア・アライアンス・パートナー社は、2014年にタイで創業し、日本の企業進出支援、会計・法務サポートを行っている。鳥取県東南アジアビューローは、平成25年10月に県が開設したが、当社は2016年度から委託を受けて、現在2社目である。
- ・東南アジアビューローの主な業務は、東南アジア展開を図る企業の相談・支援・コーディネート業務と観光プロモーション支援であり、後者については本日同席の和テンション社と連携して行っている。
- ・県内企業支援としては、展示会の出展支援、県内企業とタイ企業の業務提携サポート、進出企業の展開支援、現地市場調査のサポート、県内企業からの市場調査依頼への対応、鳥取県内でのタイ・ビジネスセミナー開催などを行っている。
- ・金属製品展示会「メタリクス2016」には県内2社が出展し、タイ企業との取引に関する助言も行っている。菓子製造業の連携パートナー発掘サポートや、酒造会社の取引パートナー発掘や試飲会開催のサポートも行った。
- ・観光プロモーション支援では、タイ旅行フェアでの鳥取県ブース出展、タイでの鳥取県観光情報説明会の開催、タイ人向け日本観光フリーペーパーでの観光PR、鳥取県観光パンフレット作成、タイ語版Facebookの運営などを行った。観光情報説明会は米子ー香港便就航と結びつけてタイでは初開催であり、Facebookの「いゝね」数は1年で倍増した。
- ・旅行フェアではコナン・鬼太郎の着ぐるみも登場する。コナンは毎週テレビ放送していて広く知られ、コナンと写真を撮りたい人たちで列ができた。鳥取の認知度は低いですが、コナ

- ンを結びつけて認知度アップを狙っている。ピンクカレーも写真映えするので、人気。
- 2016年2月の旅行フェアでの来場者アンケートでは、中国5県の認知度は広島県が1位(原爆・宮島)、鳥取県が2位だったが、2017年9月には広島県を抜いて1位になった。旅行フェアの現場でも、鳥取を知っていて、その上での質問が増えている。
  - 実際に鳥取に行かれた方からは、砂丘・大山・コナンの評価が高い。鳥取に行かれる方は訪日4～5回目のリピーターで、ツアーよりも個人・家族旅行が多い。先日、鳥取市にできたカプセルホテルも注目されている。食事は居酒屋などで、カニは人気。また、バスでの移動ニーズが高い。

#### <質疑応答>

○鳥取へ観光で入るルートは。

- 関西空港への深夜便利用が多い。カニ、雪へのニーズはある。1回来て、その後さらに何度もきてもらうための仕掛けづくりが必要。

○青山剛晶ふるさと館周辺は、県内の農産物生産拠点。果物を味わってもらえばいいが。

- 日本に多く行かれる方は、所得が中の上クラス(月12～13万円程度)。果物は、富裕層をターゲットにする必要がある。一方、他県との競争は激しい。

○鳥取として、何を売り込むかの精査が必要だろう。

○食べ物には旬があり、それを踏まえたプロモーションが必要。また、ズワイガニは東部、ベニズワイガニは西部などの分けも必要では。

- アッパー層は、人口6,600万人の5%程度。例えば、季節ごとに頒布会形式で旬のものを出していくなどの仕掛けが必要。

○観光、どんなことに人気があるのか。

- サイクリングは人気。季節ごとにあったコンテンツのPRをしている。

- (合銀) 製造業では、社員の高齢化により「検品ができない」として、県内企業からタイ進出の相談を受けることがある。

○アジア・アライアンス・パートナー社は、他県からも委託を受けておられるのか。他と比較しての鳥取のメリット・デメリットは。

- 鳥取・島根・大阪から受託している。鳥取は観光に力を入れ、成果が出ている。一方、企業進出は島根と比べても少ない。技術力のある優良企業は、国内で仕事ができなくなってきている面もある。

- (合銀) そもそもの産業蓄積として、島根は自動車部品が多く、鳥取は電子部品が多い。進出企業も、自動車電装関係が中心。背景にはそういう違いもある。

○タイを拠点として考える場合、観光以外での課題は何か。

- (合銀) 各県単位、山陰単位でも小さすぎる。直通便がないので、どこと組んでやるのが重要。タイでは、進出の終わった大企業の隙間を狙うべきでは。カンボジア・ベトナムなど、インドネシアのハブとしてタイは重要。合銀としても、進出後のフォローを大事にしたい。

- タイの部品メーカー、レベルが上がってきている。しかし技術力を上げるため、中小であっても日本の企業と組みたいというニーズはある。マッチングが大事。

- (合銀) 事業承継上も、海外進出していると後継者が魅力を感じて帰ってくることもある。また、海外であれば人目を気にせずチャレンジできる。経験や人的ネットワークの形成の上でも大事。事業承継の一つのアイテムとして、海外進出を促進する施策があればよい。

- 明治製作所は、日本でも人手不足。タイで育成した労働者を日本に入れる策もあるのでは。
- タイ人のニーズはある。処遇が日本人並みになるのなら、ハードルは低いのでは。もっと人材交流を行うことが重要。



意見交換の様子



説明者の皆様と

**【平成29年11月9日（木）】**

**（4）JNTO（日本国政府観光局）バンコク事務所**

〔対応者〕伊東和宏 所長、山田怜 次長

タイの訪日観光客の動向、訪日観光客の誘客活動の現状と課題などについて説明を受け、意見交換を行った。主な意見交換の内容は以下のとおり。

**【主な意見交換内容】**

<概要説明（途中、訪問団からの質問もはさみながら）>

- ・平井知事はタイにとっても熱心で、私も5～6度お会いしている。印象的なのは、「鳥取は、

人口が一番少ないが、妖怪が一番多い」というフレーズ。鬼太郎とコナンを組み合わせ、熱心にPRされている。

- ・タイからの訪日客、2016年は90万人を超え、今年も90万人後半の予想である。来年こそは、懸案である100万人を超えるようにしたい
- ・タイから日本は飛行機で6～7時間であり、インバウンドでは中距離に当たる。訪日客で多いのは韓・中・台の近距離だが、中距離で最も多いのはタイであり、ASEANでは断トツである。タイ人は日本が大好き。日本でも、タイ人観光客はマナーがよく好評であり、相思相愛と言える。
- ・最近の大きな動きとしては、プミポン前国王の喪が10月に終わった。街や服の色もカラフルになった。11月以降、政府関係者・関係企業の出張や、民間企業のインセンティブツアーなどが復活する見込みである。
- ・もう一つの動きとして、ICAO（国際民間航空機関）が「安全上問題がある」として行っていたタイへの航空規制が10月末に解除された。これにより、新規就航便やチャーター便の開設が可能となる。来年3月ごろには、新規就航便も出てくるのではと考えている。LCC（格安航空会社）、日本便ではタイ2社、日本1社（ピーチ・アビエーション）が就航している。その他のLCCからも、どこに就航させたらよいかの問い合わせが多い。
- ・大観光地であるチェンマイとの航空路線は、日本からはバンコクか、香港、仁川（韓国）経由。直行便が出るように依頼している。来年1月、「B to C」（企業による一般客向け）の旅行博覧会を初めてチェンマイで開催するので、大きな誘客になるよう期待している。バンコク以外の地方にも攻めていきたい。カンボジアは全日空の直行便があるが、主に日本人向けで、訪日客は富裕層で1万人くらい。なお、東南アジア市場の日本製品は、全てタイから流れている。インドシナ半島の動きは、タイから波及していく。
- ・喪が明けて、各都道府県とも熱心にPRされている。知事レベルも来られるが、どの県も「タイは重点市場」とおっしゃる。ただ、京都や東京はプロモーションしなくても人が来るので、来られない。滋賀県は、自県の名前を前面に出さず、「京都から15分。京都で泊まればこちらへ」とPRされている。
- ・ピーチ・アビエーションのバンコクー沖縄便は、約4時間。「タイに一番近い日本」として売っている。文化・ビーチなどの沖縄らしさを楽しむというより、「日本を沖縄で体験する」という売り方。片道1万円でもとても安く、乗客は往復ともタイ人が中心となっている。
- ・鳥取は、リピーターの来るエリア。若い人はスマホで写真を撮り、周りの友達に見せる。写真映える、タイでは見られないような景色や料理があり、それを写真に撮ってもらえば、広まっていくように思う。
- ・最近のトレンドとして、3年ほど前から、雪を楽しみに冬季の客も増えてきた。スキーではなく「雪遊び」レベルのニーズだが、「雪」はひとつのキーワードになっている。また、食べ物は日本人が並ぶところでも並んで食べる。牛肉もカニも人気。鳥取の魅力は、平井知事からたっぷり伺っている。
- ・タイ人は毎日日本食でも大丈夫だが、同じものだと駄目に変化はいる。宗教上、牛肉が駄目な人でも、日本にいくと食べる。そういう人は、「和牛は柔らかいので、牛ではない」と言っている。
- ・交通が不便なら、英語ナビでレンタカーが使える。タイは、日本と同じ左側通行、右ハンドルで、しかも走っている車の9割は日本車。バンコクはジャカルタと並び、世界で一・二を争う渋滞がひどい都市で、「渋滞がない」は一つのポイントになる。

- ・来年2月、タイの旅行業界による国際旅行フェアがある。その3分の2が日本のブースなので、実質的には日本フェア。4月（桜）と秋が月10万人を超えるハイシーズンなので、それに合わせて開催する。
- ・タイからの訪日客は、4～6日程度の旅行期間。環日本海諸国とは異なり、タイは遠いのでクルーズは望めず、航空機を前提に考える必要。
- ・魅力創出のためには、食事後の夜のイベントがいる。夜の祭りやショッピングなど、夜の魅力。鬼太郎ロードの夜の散策はいいかも。「星取県」での星空観賞は、単に星を見せるのではなく、誰かが解説してタイ語で通訳することが大事。夜の食事の後、コンビニしかないのもったいない。24時間営業のドンキホーテに訪日客がいくのは、タイバーツが使えることもあるが、そういうことである。なお、タイのデパートは「ミッドナイトセール」などと言って、深夜12時ごろまで営業することもある。
- ・「ここでしか買えない」「ここでしか体験できない」に人は魅かれる。おみやげとしては、お菓子が好まれる。旅館やホテルの売店が、早い時間に閉めるのは本当にもったいない。夜だけでなく、朝市もいい。そうすると、泊まってもらえる。



意見交換の様子



JNTOバンコク事務所内にて

## (5) エッグタイランド社

〔応対者〕 中本和夫 社長、佐々木真理 氏

事業概要、海外事業展開の経過、雇用状況、本社との役割分担や連携などについて説明を受け、意見交換を行った。主な意見交換の内容は以下のとおり。

### 【主な意見交換内容】（○：訪問団、●：視察先）

#### <●概要説明>

- ・本社であるエッグ社の顧問が、キャセイパシフィック航空（香港）勤務時にタイにおられた。私（中本社長）は兵庫県出身だが1972年からタイにいて知り合い、高下社長に紹介されたのが始まり。佐々木氏は前からの知り合いで、コンピュータに詳しく、タイに現地法人を立ち上げるようになってからペアを組み、設立に向かった。会社設立は今年4月で、6月にオフィスの開所式を行った。このビジネスは、人材が肝である。
- ・（佐々木氏）ソフトウェア開発の現状として、納品の時期や品質とも、ほぼ予定通りにできている。現地社員は、大手IT企業出身者、10年を超える経験のあるシステムエンジニアやプログラマーが中心的な役割を担い、あとは新卒者である。日本の本社とは毎日テレビチャットで、指示・やり取りを受けている。本社の評価は、普通の海外発注（オフ・ショア）よりもコミュニケーションがよく、品質が問題ないというもの。また、本社だけでなく、現地企業からもシステム開発を受注した。もっと営業をかけて、本社以外の案件を受けていきたい。
- ・コンピュータ関係とは別に、介護実習生を育成して、日本に送り出すことを考えている。タイ北部チェンライの福祉専門学校と連携して、日本語を教育している。この11月1日から、外国人技能実習制度に介護が追加されて書類受付が開始され、来年2～3月には受入開始が見込まれる。ただし、ベトナムやミャンマーは、タイよりも取組が進んでいる。
- ・技能実習生には、日本語能力試験で、基本的な日本語を理解することができる「N4」というレベルが求められる。この「N4のカベ」は大きい。ミャンマー語は文の構造が日本と同じなので、より習得が早い。しかし、日本で30万人以上が不足していると言われる介護人材は、大きなマーケット。鳥取県内の社会福祉法人の方とも意見交換している。
- ・具体的には、懇意にしているタイ国内の送り出し機関（国の許可あり）と提携して、仲立ちをする役割を担う。学生は15～16歳からで、メインは18歳くらい。もともと看護師志望という点で、差を出せる。今の状態でも、言葉はできないが、介護レベルは高い。なお、タイでは「サブ・ナース」が介護業務を行っている。

#### <質疑応答>

○海外進出のメリットは何か。

- まず、人材コスト。2分の1から3分の1程度の給料で、人材を確保できる。次に、人間の質。親目的な国で、45年タイにいて嫌な思いをしたことはほとんどない。仏教国でもある。ただし日本からの企業進出はここ4～5年停滞していて、特にバンコク以外の地方で著しい。ここ3年の軍事政権や、前国王の逝去を受けて、状況をみているように思う。

○システム系の業務は、これから広がっていくのか。

- スマートフォンの普及は著しい。日本企業のシェアは5～6割である。
- （佐々木氏）「エアコンの効いた会社で働きたい」という若い人のニーズがある。タイ人は

手先が器用で、また一つのことに集中するのも得意なので、プログラマー向き。そういう職業への、若い人のあこがれもある。

○プログラマーの教育は、どのように行われているのか。

●（佐々木氏） 専門学校よりも大学が中心。「ビジネスコンピューター」という分野になる。



オフィス内の様子



説明者の皆様と

#### (6) グリル東京（大規模ショッピングセンター「サイアム・パラゴン」内）

〔応対者〕 森三義 料理長

タイでの鳥取食材の活用状況、鳥取の食材の魅力と課題などについて説明を受け、昼食を兼ねて意見交換を行った。主な意見交換内容は以下のとおり。

##### 【主な意見交換内容】

<概要説明（途中、訪問団からの質問もはさみながら）>

- ・鳥取の食材で今使っているのは、ベニズワイガニの加工品、カニみそ、野菜、梅ジュースなど。客はタイ人が中心だが、特にカニはタイ人にとっても好評。輝太郎柿も、つい数日前



まで使っていた。鳥取の食材は本当によく、もっと使いたい。

- ・鳥取の食材をたくさん使ったコースメニューを、年明けごろに提供予定。来年1月に、ここで鳥取フェアを開催する予定にしている。
- ・本当は、オレイン55など、牛肉をもっと使いたい。しかし、商社のルートの関係もあり、なかなか思ったように使えないのが悩み。ただ、鳥取フェアでは、何とか使えるようになりそうである。
- ・鳥取の食材、本当は普段からもっと使いたい。この商社ルートの問題は大きなハードルになっている。何とかしたいし、何とかなればよいのだが。



レストラン入口



森料理長と

#### (7) マヒドン大学工学部（表敬訪問）

〔応対者〕 チャクリット・スタコーン 工学部長、ヨッチャナン・ウォンサワット 副学部長、  
ロナチャイ・シロウェーヌクン 学部長補佐、ほか関係職員

学部概要、医療機器に関する研究・人材育成及び海外との連携状況、本県の中小企業との連携取組などについて説明を受け、意見交換を行った。意見交換終了後、研究室を御案内いただいた。主な意見交換内容は以下のとおり。

#### 【主な意見交換内容】（○：訪問団、●：視察先）

<あいさつ（骨子）>

○（齊木団長）皆様には10月22日から25日まで本県に御来訪いただき、ダイキンアレス青谷にて、県内企業との意見交換に臨んでいただいた。2015年11月、本県との協力に関する覚書締結以降、今回を含め計3回来県いただき、心よりお礼申し上げます。今回我々は、企業進出、輸出、大学連携、訪日観光客の動向などを調査するために訪問した。タイへの県議会訪問団の派遣は、2年前に続いて二度目である。本日は多大なる御配慮をいただいたことに対し、厚くお礼申し上げます。

●（チャクリット工学部長）本日はようこそいらっしゃった。充実した訪問・交流になることを願っている。鳥取県は我々との連携に、非常に熱心に取り組んでいただいている。医療機器の研究開発に向けて、一層の連携の深化を期待している。

<●概要説明>

- ・（紹介ビデオ）大学のモットーは「Wisdom of the Land（この地の英知）」。

1943年創立で、タイで最も歴史のある国立総合大学。特に医療・生命科学分野が充実。40を超える国々の約400の大学・研究機関と協定を結び、学生の交換プログラムや共同研究を実施。（※日本国内では東京大学・大阪大学など約50校と連携。）

- 工学部のビジョンは、「あらゆる知識を使って研究に臨む」。重点テーマは、ヘルスケア、物流・鉄道、デジタル、持続可能な発展、の4つである。
- 研究にあたっては、「4I（アイ）の基準」に基づいて行っている。すなわち、
  - (1) Interdisciplinary（学際的）
  - (2) Innovation（イノベーション）
  - (3) Industrialization（産業化）
  - (4) Internationalization（国際化）の4つである。
- 鳥取県内企業との連携は、医療機器分野だが、これは重点3分野（医療機器、航空機、自動車産業）の1つである。それぞれ、担当する教員を決めている。
- マヒドン大学の特徴として、医学部・医療技術学部と工学部があり、医療機器分野においてはそれらの連携が可能であることが挙げられる。現在、新キャンパスを整備中だが、そこには新病院と工学部が入る予定である。
- 現在、先端医療ロボットセンターを整備中である。国からの支援も受け、狭い意味でのロボットに止まらず、医療機器の研究開発を行う。日本企業との連携事業も行っていく。
- 進行中のプロジェクトとして、「メーカー・プレイス」がある。これは、学生向けと企業の試作向けの両方がある。企業向けは、オフィスや試作用機器を設置し、大学の研究者と連携して研究開発を行うことができる。半年以内に完成予定であり、鳥取県内の企業にもぜひ活用してほしい。
- 鳥取県内企業との連携についても、タイ政府の支援を受けられるよう努力している。

#### <●研究室見学・説明>

- 生医学ロボット工学センター（BART: Center for Biomedical And Robotics Technology）は、チャクリット学部長の研究室である。博士後期課程の学生が、医療補助、障がい者補助、救助用ロボット、地雷処理用ロボット（タイ・マレーシア国境用）、家庭用のサービスロボットなどの研究開発に取り組んでいる。
- 穿刺手術ロボットの研究開発にも関わっている。世界的にはアメリカで開発された「ダヴィンチ」が有名だが、ロボットでの手術の方が低リスクであり、医療費は高くても患者はそちらを選ぶ状況になっている。10人外科医がいれば、ロボット手術ができるのは5人程度。それ以外の医師でも高いレベルの手術ができるよう、補助ロボットを開発している。
- 研究室の学生は、医学系が3人、工学系が6人である。医学系から工学系に出向してきている学生もいる。



大学構内を望む



意見交換の様子



研究室見学の様子



学部長をはじめ皆様を囲んで